



感染症とたたかう

発行:国立大学法人 長崎大学 監修:長崎大学病院 感染制御教育センター長・教授 泉川 公一
お問い合わせ:長崎大学感染症共同研究拠点 〒852-8521 長崎市文教町1-14 TEL:0120-095-819 FAX:095-819-2960

疑わしい時はまず医療機関へ！ 早期の受診で重症化を防ぐ



一般的な「風邪」とはまったく違う インフルエンザの怖さ

全国的に、インフルエンザが流行しています。1月18日には国立感染症研究所が、全国の感染者数が警報レベルに達したと発表しました。インフルエンザは「インフルエンザウイルス」によって起きる感染症で、毎年1～2月が感染のピーク。“風邪薬を飲んで、しばらく安静にしていれば治るだろう”と、医療機関を受診しない人もいますが、風邪とインフルエンザとはまったく異なる疾患です。

咳やのどの痛みなど、風邪に似た呼吸器の症状もみられますが、多くの場合、38℃を越すような高熱や全身の倦怠感、筋肉痛や関節痛、頭痛など全身の症状を伴います。乳幼児や高齢者、糖尿病をはじめ慢性疾患を持っている人などの場合は、インフルエンザ脳症や重症肺炎など、重大な合併症が発生する危険性もあります。

インフルエンザにかかると、気管支の表面細胞が壊れて細菌に感染しやすい状態になります。また、免疫細胞の働きが弱まり免疫力も低下します。そのため、高齢者や体力が弱っている人の場合、インフルエンザの症状が治まりかけても、その後に細菌性の肺炎を起こす可能性が高まります。

周囲のためにも自分のためにも 早めの受診を心がけよう

インフルエンザウイルスは、主に咳やくしゃみなどによる「飛沫感染」、あるいは「接触感染」で人にうつります。1回の咳やくしゃみで2mほど先までウイルスが飛散することが判っています。また、感染力も非常に強く、飛沫を直接吸い込まなくても、ウイルスが付着したテーブル等から指や手のひらを介して感染するケースも少なくありません。本人が苦しいだけでなく、周囲の人にうつす可能性が高いこともインフルエンザの怖さなのです。

急な発熱や関節痛、全身のだるさなどを自覚したら、早めに医療機関を受診しましょう。すでにインフルエンザワクチンを接種している人や高齢者の場合、あまり熱が出ないこともあります。「熱が高くないからインフルエンザではなさそう」と、勝手に判断してはいけません。

医療機関では、綿棒などで鼻の穴の粘膜を採取してインフルエンザの検査を行います。発症初期のうちにはウイルス量が少ないため、正確な結果が出ない場合もあります。検査で「陰性」と言われても、明らかに平常時とは違う自覚症状がある場合は、念のために、もう一度検査を受けた方が良いでしょう。